

おはなし散歩道

芋たぬき

町田市 大澤桃代

ある山に、一匹のたぬきが  
おった。

秋も深まり、山には柿  
の実も木の実もなくなっ  
た。たぬきは里に出た。

たまらなく腹が減ってい  
て、何でもいいから食  
いたかった。ヒューン、ヒ  
ューンと、北風が通り抜  
ける。今夜あたり初雪が  
降るかもしれない。

転がるように山道を行  
って、村外れの地蔵様に  
着いた。ふと見ると、畑  
に煙が上がっておる。悟  
作どんの畑だった。

たぬきは身構えた。あ  
の爺は苦手だ。山の生き  
物と見れば石を投げてく  
る。ある夜、爺の畑を通  
りかかると、キツネが罾  
にかかっておった。キツ  
ネは哀れな目をしておっ  
たが、どうする事もでき  
なかった。以来、悟作ど  
んの畑には近づかぬえ。

たぬきは地蔵様の陰か  
ら様子を見た。畑仕舞い  
をしているらしく、掘り  
残したさつま  
芋を焼いてお  
る。悟作どんは、  
チラッと地蔵  
様を見やっ  
たが、すぐに火  
の番に戻った。  
いい匂いに、  
たぬきの腹が  
鳴り、ヨダレ  
が出る。

——芋食い  
てえ……

近寄っては  
いけねえと思うが、足が  
勝手に畑へと動いてしま  
う。

「そろそろ、焼けるべ  
と、悟作どんが棒切れで  
たき火を突つづく。

「もう、ちつとだなあ」  
ため息をつき、独り言  
をいう。白い煙が上がり



匂いが強くなる。  
「松子でもいれほいに」  
——松子?

ああ、あの子だ。

夏の夕方、悟作どんは、  
おかつば頭の女の子と、  
トウモロコシや茄子を、  
もいでいたつけ。ここに  
松子がいねえのは、留守

子になっていた。

「爺ちゃん、爺ちゃん」  
たぬきは悟作どんにか  
け寄った。悟作どんは、  
目を丸くしたが、すぐに、  
「おう、おう」と笑った。

「爺ちゃん、焼けたか？」  
たぬきは甘えていった。  
「ああ、もうちつとだな」  
悟作どんは、棒でたき  
火をかき分け、芋を突く。  
ほわん、とたまらない  
匂いがたぬきの鼻をくす  
ぐる。ぐうぐう腹が鳴る。  
「まだ固いとこがあるべ  
もうちつと待てな」  
うん、とたぬきは座り  
こんだ。悟作どんは、た  
びたびたぬきの顔を覗い  
て、嬉しそうに笑う。

「ほれ、ふうふうして食  
え。急ぐと火傷するぞな」  
悟作どんは、湯気の立  
つ芋を半分に分けて、手  
拭いにくるんで差し出す。  
香ばしい匂いに負けて、  
冷めやらんうちにかぶり  
ついたからたまらん。

「あちーっ！」と、たぬ  
きは大声をあげた。

とたん、化けの皮がは  
がれ、毛だらけの顔や手  
がむき出す。着物の下か  
らは尻尾が飛び出す。  
ほんの、ちつとの間だ  
ったが。

たぬきはあわてて松子  
に戻り、悟作どんを見た。  
悟作どんは、相変わらず  
笑っておる。たぬきはふ  
うふうと芋を冷ます。口  
ん中がちつと痛え。

悟作どんは優しくいう。  
「ゆっくり食え、たぬき  
や。とつくにわかるとる」  
そうして、もう半分の  
芋を寄こした。

「松子はどういねえ。夏  
の終わり、川に流されて  
死んだだ。ほんでも、ま  
た会えて嬉しかっただよ。  
ありがとなあ、たぬきや」  
悟作どんは涙声になっ  
た。たぬきは尻尾が飛び  
出たのも忘れ、芋を手に  
呆けておった。悟作どん  
は「芋、食えな」という。  
たぬきがかぶりつくと、  
芋はちつとばかりしよっ  
ぱかったんだと。(完)

(さし絵・小出 茂)

第十回高尾山健康登山  
親睦会の集い

去る九月二十六日(土)、第十回高尾山健康登山親  
睦会の集いが行われ、百名を超える会員の皆様が多  
加された。  
波多野重雄会長と原秀誠僧正による御挨拶により  
開会され、昼食を召し上がった。  
その後はベリーダンス(中東及びアラブ文化圏で  
発展したダンススタイル)を鑑賞し、会場は大いに  
盛り上がった。



華麗なベリーダンスが披露される

私たちが出来ること

友納あけみ

我が家のベランダから  
見える湾岸の空に美しい  
夕焼けが広がっていきま  
す。この夏の長い長い雨  
で、洗われた空は、茜  
色というより、柔らか  
な桃色、桜の花びらを  
思わせるようです。ま  
るで南国のスコールの  
ように激しい雨を降ら  
せた空!あの同じ空と  
は思えない穏やかさで  
す!テレビから流れた  
雨で氾濫した川の流れ、  
避難される人々の姿、  
流されていく家々、水  
浸しになった田畑の映  
像:自然はいろいろな  
顔を持っています。そ  
の、計り知れない凄さの  
前には、私たち人間の力  
は、本当にか弱く、儂い  
ものだと!あの震災の時  
に感じた底知れぬ恐怖を  
反芻してしまします:  
この夏の一番暑い頃、



れに失いながらも、復興  
に向かい力を合わせ、前  
向きに活動を続けていら  
っしゃる地元の主婦の方  
達にお話を伺わせて頂き  
ました。いろいろなもの  
を失って、本当に大切に

しなくてはならないもの  
は何か?幸せとは何か?  
改めて考えた:一人一人  
は本当に無力な存在だか  
らこそ、手を取り合い、  
励ましあい、それぞれの  
できることで、助けあわ  
なくては!復興が遅々と  
して進まない大変な日々  
の中でも、自分達の経験  
してきたこと、想いの  
中から、何かを感じて  
生かして欲しい!と言  
われしました。あれだけ  
のことを乗り越えられ  
た皆様の言葉には、重  
さと、説得力がありま  
した。音楽をお届けす  
ると、皆様の顔が、  
パーッと明るくなって、  
一緒に声を合わせて下  
さり、お帰りには皆様  
が手を取って、喜んで  
くださって、改めて、  
音楽の力を教えて頂い  
た気持ちで、これからも  
少しでも幸せな時を届け  
られるよう:精一杯、精  
進しなくては!と、これ  
からの自身の立ち位置  
を感じさせて頂いた瞬間  
でした。